六　ピアノとともに

わたしは音楽が好きで、小学校の頃からずっとピアノを習っています。鹿児島市民文化ホールで開催される南日本ジュニアピアノコンクールはもうすぐです。（これまで頑張ってきた練習の成果を発揮したい。）そんな気持ちで課題曲に取り組んでいます。

わたしは実際に音楽ホールへ出かけて行って、生の演奏を聴くことを楽しみにしています。その中でわたしの心にとても印象深く残っている演奏会があります。それは、あるピアノ演奏会でした。そのピアニストは八十八歳。後ろの髪が少しカールしていて、どこか外国の作曲家のようにも見えます。眼鏡（めがね）の奥のやさしそうなひとみでこちらを見て、観客に軽くあいさつをされました。そして次の瞬間くるりとピアノに向かい静かに弾（ひ）き始めました。曲はわたしの大好きな「エリーゼのために」。

© Nakama Masashi

© Nakama Masashi

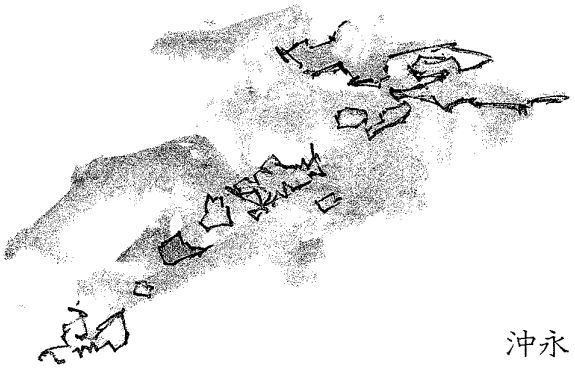
〈南日本音楽コンクール第40回記念ガラコンサートより〉

自分も練習したことのある曲です。でも、なんだか別の曲に聞こえるほど響きが違っていることに衝撃を受けました。わたしはその人の温かい音色にそっと包み込まれているような感動を初めて味わったのです。しかも舞台で演奏している彼は、いかにも楽しそうに生き生きと弾いています。全く年齢を感じさせませんでした。次はモーツアルトの「トルコ行進曲」です。本当にすみきった美しい音色で、わたしの心まできれいにしてくれるような演奏です。わたしは音楽の中にすっかりとけ込んだような気持ちで聴きながら（こんな柔らかいすてきな音はどうやったら出せるのだろうか。この方はどんな練習をしてこられたのかな。）と思いました。この八十八歳のピアニストについて、わたしはもっともっと知りたいと思ったのです。

© Nakama Masashi

その人の名前は武田恵喜秀。故郷は沖永良部島の和泊町で、両親は主にサトウキビの栽培をして生計を立てていました。彼は三番目の男の子として生まれました。沖永良部島は、子守歌や労働歌、踊りの歌、手まり歌などさまざまな音楽に溢れています。彼も幼い頃から三味線の音色に親しんできました。この豊かなふるさとの環境こそ、彼の音楽家としての原点だといわれています。初めて音の出る「魔法の箱」オルガンに出会ったのは、彼が小学校一年生のときです。当時オルガンは学校の貴重な楽器でしたから、自由に弾くことを許されなかったといいます。しかし、放課後そっと鍵盤を押して音を確かめながら、いくつかの曲を弾いたりしていました。

十六歳になった恵喜秀は、故郷の沖永良部島を出て、鹿児島師範学校に通うことになりました。そこで初めてピアノと出会ったのです。音楽好きの彼は夢中になってピアノを弾きました。時間を忘れて一心不乱に練習を重ねたといいます。そして良き指導者にも恵まれ、彼はめきめきと上達していったそうです。後に、彼は、「夢をもつことで努力ができる。自分の好きなことだったからこそ頑張ることができたんだよ。」と言っています。そして、どんなときもピアノを心の支



沖永良部島

えとして生きていくことになったのです。

その後小学校の音楽教師となって活躍していた頃、第二次世界大戦の召集令状（しょうしゅうれいじょう）が届きました。彼は故郷の沖永良部島へ守備隊員として入隊しました。戦況が悪化していく中で、（妻は無事でいるだろうか。大切なピアノは空襲（くうしゅう）で焼けてしまったのではないだろうか。）と心配で眠れない夜が続いたといいます。やがて終戦をむかえ自宅へ帰ると、ピアノは奇跡的に焼失をまぬがれていました。そして、彼の演奏活動のすべてを支えてくれることになる妻も無事でした。

「戦地から無事に帰ってくることができた。これから思う存分ピアノが弾ける。今日からが僕の音楽人生の始まりだ。」と語り、さっそくピアノリサイタルの準備にかかったのだそうです。

その日以来、五十年にわたり、演奏活動を続けました。

恵喜秀はピアノの演奏について、次のように語っています。

「人前で演奏するには精神力、集中力が大事です。しかし、時には失敗もあることでしょう。その失敗を次にどう生かしていくのか。それを考えることがもっ

© Nakama Masashi

〈鹿児島交響楽団　第29回定期演奏会より〉

と大切なことです。」

また、「ピアニストは音楽しか聴かないことが多い。しかし、もっと芸術の他の分野、たとえば絵画（美術）やお芝居、書の世界などに自分を高めてくれる何かがきっとある。好奇心や探求心をもつことです。そして意欲を燃やすことで自分の個性を伸ばしていけるのです。」と語っています。

© Nakama Masashi

〈若い演奏家を励ます武田氏〉

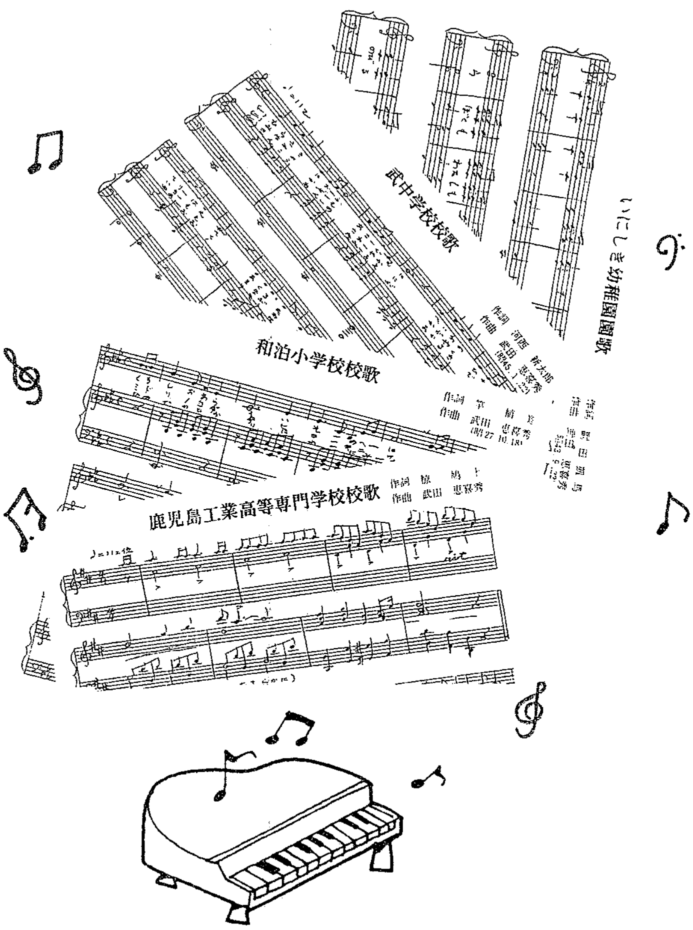
彼は自分の演奏活動だけにとどまらず、鹿児島の交響楽団やオペラ協会、そして混声合唱団の創設に力を注ぎ、基礎を築きました。また音楽の道を志す後輩たちのために、南日本音楽コンクールを創設して長年にわたって審査員を務めました。今では、このコンクールは国内だけでなく、国際的にも注目をあびるような音楽家を育てる場となっています。

レッスンの中で彼はいつもまず生徒の良いところを見付けて、励ましながら伸ばすようにしていました。その姿勢は他の演奏家たちに対しても同じで、いつも温かい言葉で評価してあげたといいます。「人と接するときはその人のよいところ、輝いているところを見つけてあげなさい。」と語っています。

また、ふるさと沖永良部では「新春演奏会」や「音楽コンクール」を創設し、音楽を勉強している子供たちのレベルが確実に向上してきたことをとても喜んでいたそうです。
彼は鹿児島の子供たちが、優しく素直な心で成長してくれることを願いながら、百九十一曲もの校歌を作曲しています。九十二歳という人生最後の時をむかえるまで五線紙に向かって作曲をしていたそうです。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

武田恵喜秀先生の音楽に出会えたことや先生の残された言葉を知ることができてよかったなあと、改めて感じています。
わたしはこれまでとは違った気持ちで、ピアノを弾くようになりました。



〈自筆の楽譜〉

（写真提供）中間眞司